

# 悠久の京を訪ねて Part VI Vol.3



KYOTO  
ARCHAEOLOGY CENTER

京は古より人々が集い、その気候・風土の中、人々の生活が営まれてきました。

京都府内の遺跡で多数発掘された出土品により、縄文・弥生時代までさかのぼり、当時の様子を知ることができます。

私たちが住んでいる地域にはどのような歴史があったのか、出土した資料を基に過去の文化やその発祥の歴史を訪ねましょう。

Part VIでは京都府内で見つかった、ものづくりに関する遺跡を紹介します。

## 鉄をつくる

遠慮遺跡ほか



### ■ 専門化された鉄生産

鉄器は、稲作文化とともに中国・朝鮮半島から日本に伝わりましたが、素材の鉄そのものは、弥生時代には大陸からの輸入が中心であり、製鉄の技術は古墳時代後半になって日本国内に定着したと考えられています。鉄器を作る工程には原料から純度の高い鉄素材を抽出する「大鍛冶」と抽出した鉄素材を製品に加工する「小鍛冶」があります。

大鍛冶では、原料の鉄鉱石や砂鉄を炭とともに製鉄炉の中に入れて溶かし、不純物を多く含む鉄滓を炉の外に流して、純度の高い鉄塊だけを抽出します。抽出した鉄塊は、そのまま鉄素材として利用されました。

小鍛冶では、板状の製品に加工した鉄素材を工房に持ち込み、水などに入れて急冷する「焼入れ」と鍛冶炉で加熱する「焼戻し」を繰り返すことで強靱な鉄器に仕上げます。製鉄や鉄製品の加工には極めて高度な技術が必要とされ、専門の技術者集団が行ったと考えられます。



製鉄炉と鉄滓の出土状況（黒部遺跡）

### ■ 丹後の製鉄コンビナート

古代の製鉄遺跡は府内では丹後地域に最も多く分布しており、約50カ所あります。古墳時代から平安時代にかけての大規模な製鉄遺跡である京丹後市遠慮遺跡（府指定史跡）や黒部遺跡、ニゴレ遺跡の発掘調査では、多数の製鉄炉や鍛冶炉、燃料となる炭を焼いた炭窯が見つかり、鉄の生産から製品の生産まで一連の作業が行われていたことがわかりました。製鉄炉は合計22基見つかり、約半数が奈良時代のものでした。このように、大規模な製鉄遺跡が多数存在することは、鉄や鉄製品の生産に国家が関与している可能性が高いと考えられ、遠慮遺跡では郡の役所から糧を支給されたことを示す奈良時代の木簡が出土しました。丹後で生産された鉄や鉄製品は地元だけでなく、都にももたらされた可能性があります。

古代の丹後国には最先端技術をもつ大規模な製鉄工房群があり、日本国内でも有数の鉄生産地だったのです。



遠慮遺跡の奈良時代の小鍛冶の様子（早川和子画）